様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 29 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０６９０
研究課題名（和文） 「日本」の地理的イメージの形成に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Geographical Images of Japan

研究代表者
千田 稔 （SENDA MINORU）
立命館大学・文学部・客員教授
研究者番号：２００７９４０３

研究成果の概要：「日本」という地理的イメージが歴史的に地図上でどのように解読できるかについて、「日本図」と「都市図」の古地図について試みた。その結果、行基図の後の時代に製作されたイエズス会の宣教師による地図についても「南膽部州大日本国図」と記されるように仏教的世界観が継承されてきた。つまり、近代的なヨーロッパ世界観がもたらされてくる時代状況の中でも仏教的世界観が駆逐されない文化的特質を指摘できる。一方、近世の京都の都市図において御所は菊の紋章として、また江戸の江戸城については葵の紋章として表現され、内部は中空的表現をしていることから、権力の「中空構造」が読みとれる。この場合、内部に秘められた権力は、外にはその様相をみせないという日本の権力のあり方が読みとれる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2007 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総 計	**2,700,000**	**810,000**	**3,510,000**

研究分野：人文地理学
科研費の分科・細目：人文地理学・人文地理学
キーワード：絵図・地図・地域イメージ・日本・世界観・権力構造

１．研究開始当初の背景

わが国の列島図において最古とされる行基図については、立が通説の平安時代よりもさかのぼり、奈良時代である可能性を想定した（千田 2000 年）。

その後、行基図は、仏教の本地垂迹現へとその意味を転化させる。この歴史的経緯についても、すでに考察した（千田 2003 年）。

日本列島の地図表現の問題で、さらに考察の必要な対象は、中世の「世界図・日本図屏風」に描かれた「日本図」である。現在、この種の屏風は２０点近くあるが、これら屏風図については、イエズス会宣教師によって製

作されたことが明らかにされている。しかし、これらの地図が世界図とセットにして屏風絵として使われたことにより、当時の日本人がもった世界観については、研究がなされていない。世界に視野を向けながら伝統的な日本人の世界観との関係について考察することはこれまでなされていない。

平安京は、治承元年（1177）の大火で、大極殿をけじめ市中の大部分が焼失し（大極殿は、一旦復旧するが間もなく炎上)、解体を決定づけられる。ここにおいて、本来の大極殿を象徴的中心とする宮都は姿を消し、里内裏が天皇の居所となる。それに呼応して、政治権力の重心が武家に移る状況において、京都の都市空間において、天皇に関わる空間は中空的構造をとり、近世の終末まで続く。天皇の空間が中空的構造をとる目本の都の都市構造について、地図的表現という視点から考察することも、これまでこころみられなかった。それに関係して江戸城における権力中枢の江戸城についても地図表現から権力の表層的中空性についても検討課題として無視できない。

２．研究の目的

（1)「日本」の地理的イメージを歴史的に世界観との関係で古地図から読解すること。日本人の世界観のは、中国から影響を受けた「天下」、「華夷」思想が古代には意味をもったが、後に仏教による世界観が普及していき、さらに近代的世界観がもたらされる。本研究では、仏教的世界観と近代的世界観との対立的状況を明らかにすることを目的とする。

（2)「日本」の地理的イメージを都市の古地図から権力拠点の表現によって権力構造のイメージを読解すること。思想史的に「権力の中空構造」が指摘されているが、このことと地図表現との関係について検討する。

３．研究の方法

中世の屏風に描かれた日本図の由来を考察する。

現在、知られている屏風の日本図は下記の通りである（川村博志 2003 年　)。

①卵形回法系

個人蔵（山本氏）/個人蔵（小林氏）/浄得寺/個人蔵（河村氏）

②ポルトラーノ系

発心寺/池永氏旧蔵

③方眼図法系

Ａ類　個人蔵（福島氏）/個人蔵（南波氏）/東京国立博物館/南蛮文化館

Ｂ類　下郷共済文庫/個人蔵（益田氏）

④メルカートル図法系

神戸市立博物館（池永氏旧蔵）/宮内庁/香雪美術館（村山氏旧蔵）/出光美術館（松見氏旧蔵）関係地図の写真等の収集と整理をし、各国の特性にしたがって分類する。

ヨーロッパの刊行地図資料などとの比較検討をし、屏夙にえがかれた日本図の由来について、考察する

「権力中枢の空間構造」についての「日本」イメージについては次のような方法でおこなう。　京都を対象として古地図を主な資料として、それに関係する史料（物語を含む）から、中世から近世末にいたる京都の空間構造　（里内裏と武将たちの居館、関係施設との関係）を考察する。それと関連して江戸図から江戸城という権力拠点の表現と都市構造の関係に視点を及ぼす。

４．研究成果

（1）　2007 度は、ヨーロッパにおける世界地図の形成において日本図がどのように描かれ、日本像が、外国からそして日本からどのように認識されたかに重点をお

いて研究をしたが、同時にもう一つのテーマである天皇の問題に関しても試行的研究を実施した。前者の問題については、わが国の形状を表現したもっともプリミティブな行基図をとりあげ、それが、朝鮮、中国、ヨーロッパに伝播した実態を概略的に把握した。さらに、日本における行基図が密教的意味をもつ内容に変容をすることによって「南膽部州大日本国図」というタイトルが付されることに注目した。この名称は「南膽部州大日の本国の図」図と読まれたと推定でき大日如来とアマテラスの集合から「神国」を表現するに至った過程を明らかにした。この行基図が、イエズス会の宣教師たちによって、比較的海岸線の詳しい日本図へと発展していく。この図は世界図と日本図が一双となる、いわゆる「南蛮地図屏風」として用いられていく時点で、行基図の痕跡を全く留めないにもかかわらず、「南膽部州大日本国図」というタイトルを付して、世界図と並べて一双の屏風をなした。そこには、イエズス会の宣教師によってもたらされた世界図の「世界」を認めつつも、なお仏教的世界に位置するという「日本」の存在に固執した実態が読み取れる。

このあと、慶長年間に作成された国絵図を組み合わせた日本図が作られ、やはり、世界図と一双の屏風をなすが、この「日本図」には「南膽部州大日本国図」というタイトルが付されることはなかった。もはや、ヨーロッパから伝来した世界観とは別の仏教的世界観を並べる二元的世界の存在は認識しえない状況となった。

(2) ２００８年度は都市の権威拠点から「日本」のイメージを探った。禁裏という言葉が発している空間の威厳性と排他性は、何者にも変えられない強い響きをもつ。京都の古地図のすべてではないが、御所の部分を「禁裏」という文字のみ、あるいは菊の紋で表現し、内部については何も描出しない図法が多く用いられている。二条城についても、「二条御城」とのみ記し、内部に関しては表現しない。

しかし、京都の古地図において、御所、二条城の建築物を描くのもあり、上記の地図との表現上の相違に関して、さらに吟味が必要である。

江戸を描いた地図の多くも、江戸城についてはほとんど「御城」という文字あるいは葵の紋のみで、内部は白地で、詳細な表現は一切されていない。そのような地図表現は、明治以降の官製地形図の皇居にも戦後まで指摘することができる。つまり、皇居の部分は、まったくの空白表現となっている。都市を作りあげている中枢部を空白として、描出するのは、「見せてはいけない空間」であるからなのだ。地図上の「中空表現」によってその部分の神秘性が高まるという支配原理の効果も発信されることになる。

地図表現を避けた皇居は、別の視点からその存在を表現する。それは、二重橋の写真である。観光用の絵はがきに、それが典型的で、二重橋を真横からみるアングルで撮影されている点に注目したい。その視覚は可能な限り江戸城の建造物を見せないで、近代工法による橋梁の構造を見せようとするものである。そのことから、徳川の遺産を継承する皇居を隠蔽するという意図を読みとれることができる。その点からも、皇居は「見せてはいけない空間」として意識されているが、二重橋の写真においては、「江戸」という表現を、隠蔽しなければならなかったのだ。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計　2　件）
千田 稔　中央公論新社　『平城京遷都』2008年　265ページ

千田 稔（編）和泉書院『関西を創造する』2008年　405ページ

６．研究組織
(1)研究代表者
千田 稔（SENDA MINORU）
立命館大学・文学部・客員教授
研究者番号：20079403

(2)研究分担者

(3)連携研究者